



## 緊迫化する台湾本島周辺情勢【2】—高まるバシー海峡・東沙島の地政学的重要性—

門間 理良 地域研究部長

NIDS コメンタリー

第 124 号 2020 年 6 月 16 日

前稿は台湾本島周辺海空域における中国軍・米軍の活動の実態を明らかにした。そこから、中国海軍、空軍は 2020 年に入ると確かに台湾本島周辺での訓練を活発化させていることがわかった。また、米空軍の動きも同海空域で活発化していることが明らかにされた。また、米海軍は 2019 年以後、毎月のように艦艇を台湾海峡に派遣して航行させている状況にあることも確認できた。6 月 4 日には天安門事件に合わせたかのように、米海軍アーレイバーク級イージス駆逐艦「ラッセル」が台湾海峡を通航した<sup>1</sup>。米軍艦の台湾海峡通航は 2020 年に入って 7 回目である。また、前稿で示した 4 枚の表から、中国軍の飛行や航行が台湾南部海域（南シナ海北部海域）とバシー海峡周辺にシフトしていることも明らかになった。

これらの動きは、米中関係の悪化や新型コロナウイルス感染症の世界的流行と合わせて取りざたされていることが多い。また、中国軍や米軍の動向を根拠に中国軍による東沙島武力奪取の可能性を指摘する記事やエッセイが、ネット上で散見されるようになってきている<sup>2</sup>。本稿はそのような事態は生起しうるのか、中国と中国軍の狙いを中心に分析することに主眼を置く。

### 3. 台湾東部を視野に収めた中国軍の訓練

従来、中国軍が西太平洋で訓練を実施する場合、海軍艦艇にせよ軍用機にせよ、沖縄・宮古島間を単純に往復する例が多かった。台湾国防部が中国海軍艦艇や軍用機のバシー海峡通過の事実発表を意図的に控えていた可能性もあるとはいえ、防衛省統合

幕僚監部の報道発表資料からも、中国機が①東シナ海、②沖縄島・宮古島間を抜けて太平洋、③台湾本島周辺、と徐々に長距離飛行を行うようになっているとともに、さまざまな機種を同時に飛行させるようになっていたり、夜間飛行や荒天時の飛行なども実施したりして、訓練自体も高度化している可能性がある状況が窺える<sup>3</sup>。海軍についても、前稿で指摘した本年 4 月の「遼寧」艦隊は 22 日から 28 日まで太平洋で訓練を行ったが、これはグアムで検疫期間中にあった米空母「セオドア ローズベルト」が欠けた状況の米軍の反応を見る狙いもあったとも考えられる<sup>4</sup>。

中国軍の訓練海空域のシフトの理由として、以下が考えられる。第 1 に、中国軍が台湾に進攻すると仮定した際、中国軍は単純に中国沿海に面した台湾海峡側からだけでなく、兵力を台湾本島東側海空域（太平洋側）に展開させることで、台湾軍の消耗を図ることを視野に入れているためである。第 2 に、台湾進攻の際に想定しておく必要のある米軍による台湾支援作戦に対抗するために、戦線をできるだけ中国沿岸から離れた前方に設定するほうが有利であると中国側が判断しているためである。

台湾海峡側からだけではなく、太平洋側から台湾を攻撃することは台湾軍に二正面作戦を強いるだけでなく、中国軍も二方向で同時に作戦することを意味し、戦況によっては太平洋側に展開させた艦隊が米海空軍に包囲される危険性も多分に存在する。だが、中国軍にしてみれば、台湾進攻作戦は米軍との戦闘をも見越して計画を立てることが大前提である。現実には戦闘状態に入るか否かは別として、中

国軍は相応の戦争準備を整えてあり、米軍の死傷者も多大なものになると言外のアピールをしておくことで、米軍の出兵を躊躇させる狙いもあると思われる。

台湾軍は歴史的には、台湾東部を中国軍の攻撃からの「聖域」と捉えてきた。台湾海峡を挟んでそのほとんどの地域を中国福建省と向き合う台湾本島西部の海岸は、基本的に上陸作戦を実行しやすい平坦な地形である。それに対して、台湾本島東部地域は中国からは遠いうえに、台湾本島の中央山脈は 3000m 級の山脈を擁しており、中国からは「死角」となっていたからである。また、台湾本島の東側のほとんどは山裾が海岸線まで迫った険峻な地形で、着上陸作戦は困難である。もちろん中国軍の作戦能力や保有する武器の性能的限界もあった。台湾本島北東部で唯一、宜蘭平原だけは大規模な着上陸作戦を実行できる海岸地形と大規模な上陸部隊を展開できるスペースを有している。また、妨害がない状況であれば、台北市と宜蘭をつなぐ高速道路を利用して 1 時間強で中国軍陸上進攻部隊は台北まで殺到することになる<sup>5</sup>。そのため、台湾国防部も台湾本島の東部海域（太平洋側）から中国軍に進攻される危険性を予測し、毎年実施される漢光演習（台湾軍最大の年次演習）で、中国軍の宜蘭平原着上陸を想定して演習を実施したこともある<sup>6</sup>。

第 3 に、沖縄・宮古島間ルートは沖縄島に強大な在日米軍が置かれているために、もともと中国軍としてはできることなら避けたいルートだったと考えられる。それに加えて、近年は自衛隊の南西諸島シフトが強化されつつある。日米の強力な監視があり、日本の防衛力が充実化する状況で、中国軍がより安全に西太平洋に展開するためには、監視の目が行き届きにくく、台湾以外からは攻撃を受けにくい台湾南部海域からバシー海峡を抜けるルートでの軍事行動に習熟しておきたい考えに至ることは当然とも言える。以前の中国軍であれば、能力の低さや、対ソ連シフトで瀋陽軍区（北海艦隊）や対台湾シフトで南京軍区（東海艦隊）が重視されていた歴史的な理由もあって、渤海や黄海、東シナ海での訓練

が重視されていた。中国軍がそこからさらに訓練海空域を広げるにあたって沖縄・宮古島間を通過し、太平洋に抜けるルートをとることはほぼ唯一にして合理的な選択肢だった。しかし、海空軍やロケット軍の戦力が飛躍的に強化されてきた現在の中国軍には、過去にできなかった様々な想定に基づく訓練が可能となっているのである。

第 4 の理由として、中国軍全体として南部戦区重視の態勢が徐々に訓練にも出てきていることが挙げられる。中国軍 5 大戦区の序列は東部・南部・西部・北部・中部とされており、台湾正面でもある東部戦区の重要性は相変わらず高い。東部戦区の場合は、東シナ海や沖縄・宮古島間海空域の利用は地理上からも納得できる。だが、中国初の国産空母である「山東」が海南島の三亜を母港としたことや、南シナ海を重視する中国の政策を背景にして、いまや南部戦区の戦力向上傾向は明らかである。南部戦区から太平洋へ展開するとなれば、南シナ海北部からバシー海峡を利用することになるのは当然である。

#### 4. 東沙島・バシー海峡を視野に入れた中国軍の活動

南シナ海北部海域とバシー海峡の戦略的重要性が増してきた現在、浮かび上がってくるのが東沙（プラタス）諸島の戦略的地位である。その中心である東沙島は中国大陸から 200km、香港から南東方向 330km で島の面積はわずか 1.74 km<sup>2</sup>である。1939（昭和 14）年に南シナ海の島々が日本統治下に入った際に東沙島も高雄市へ組み込まれたが、日本敗戦後、東沙島は広東省に編入され、後に海南特別行政区に属した。そして、1949 年以降は高雄市に編入され、台湾政府の実効支配の下で現在に至っている<sup>7</sup>。現在、東沙島には海洋委員会海岸巡防署東沙分署・南沙分署の要員を中心に 200 人程度が常駐しているが、台湾軍は空軍所属の気象観測要員や航空機の管制、メンテナンス要員程度しかいないようである。1983 年に東沙島指揮官（大佐）として赴任し

た季麟連元海軍大将は、金門島を参考にして2年間にわたり東沙島の防備体制の充実に努め、全面的地下化、拠点化の整備を行ったという<sup>8</sup>。中国軍が8月に海南島沖の南シナ海で、東沙島奪取を想定した大規模な上陸演習を計画しているとの報道もあった<sup>9</sup>。もし、そのような演習を実施するとしたら、海軍陸戦隊を主体にして、南海艦隊の071ドック揚陸艦、Z8ヘリコプター、大型ホバークラフトなどを動員した本格的なものになるだろう。しかしながら、台湾が東沙島に配備している武器は、20ミリ機関砲、40ミリ機関砲、81ミリ迫撃砲、120ミリ迫撃砲と携行式の対戦車ロケット程度であり、守備部隊は海軍陸戦隊が訓練を施しているとはいえ法執行機関である海巡署の要員であること<sup>10</sup>、台湾より中国の方が東沙島への距離上のアドバンテージがあること、東沙島の標高は最も高いところでわずか7mに過ぎず面積も狭いこと（東西に約2800m、南北に865m）などから、飛行場や埠頭の破壊を行い、中国の制空権に収めてしまえば台湾軍の補給も続かず、東沙島はほどなく陥落すると考えられる。

中国軍が東沙島を奪取した場合、干潮時に水深

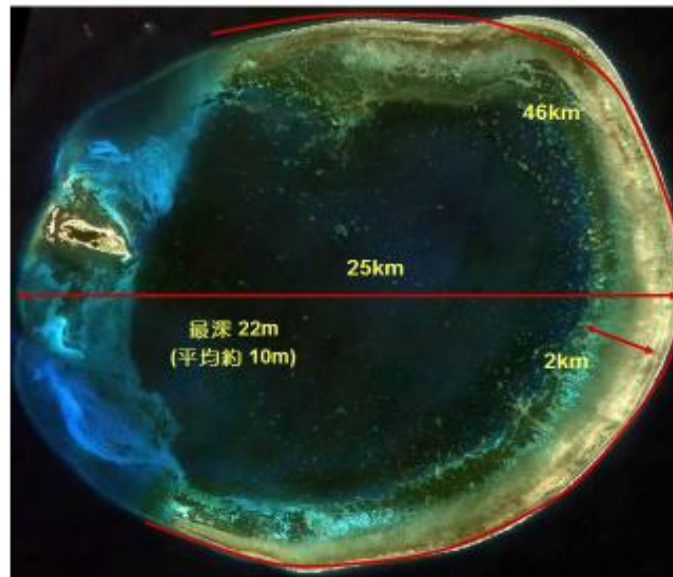
1m程度の東沙島のラグーンを埋め立てて大規模な人工島を作り上げるであろうことは、南沙諸島におけるこれまでの行動を見れば確実に予想できる。しかも、中国は南沙諸島での埋め立て作業で多くの経験を積んでいる上に、中国本土から近いため良質な土砂の運搬も南沙諸島での工事時より格段に楽なはずである。強力なレーダーや延長した滑走路、港湾施設、対艦ミサイルや対空ミサイルを配備し軍事要塞化した東沙島は、バシー海峡西側出入り口、台湾海峡南側出入口、南シナ海北部を押さえる中国軍の一大軍事拠点となる。フィリピンと係争しつつ中国が実効支配しているとされるスカボロー礁にも中国が同様の措置を施せば、南シナ海を囲むダイヤモンドが形成され、南シナ海は完全に中国の「内海」と化す可能性もある。以上のように、台湾海峡とバシー海峡、南シナ海における通航の安全にかかわる位置に存在する東沙島は、東アジア諸国の安全保障にとって、非常に重要な島なのである。

図1 東沙島



出所：海洋国家公園管理処（台湾）を基に筆者加筆

図2 東沙諸島



出所：海洋国家公園管理処（台湾）

図3 東沙島全景



出所：片倉佳史氏提供（2010年9月15日撮影）

図4 東沙島内のラグーン



出所：片倉佳史氏提供（2008年7月23日撮影）

図5 東沙飛行場滑走路



出所：片倉佳史氏提供（2010年9月15日撮影）

## 5. 中国の狙いは戦わずしての東沙島明け渡しか

香港版国家安全法の創設や新型コロナウイルス感染症の流行に伴う各国との軋轢をものともせず、むしろチャンスと捉えている中国の動きから、現在の中国は各国からの批判を受けて孤立することを厭わない姿勢が感じられる<sup>11</sup>。南沙諸島における人工島の造成は大きな国際的批判を受けたものの、それを実力で元に戻すことはどの国もできていない。いくら批判を被っても「やった者勝ち」であることを中国は学んだわけである。米軍機の台湾周辺空域での活動がバシー海峡から台湾南部空域で特に活発なのは前稿で挙げた理由のほかに、中国軍の活動の重点が南シナ海、バシー海峡に移ってきていることを理解し、各種情報を収集するとともに中国軍を牽制する意図もあるとも推測される。

とはいえ、中国が東沙島を直ちに武力で奪取すると考えるのは早計かもしれない。台湾が東沙諸島を自ら手放すように「三戦」を中国が仕掛ける可能性も高いからである。例えば、中台関係の現状維持を唱える第 2 期蔡英文政権に対して、金門、太平島、馬祖、東沙島などは、台湾の生存とは関係ない（必要ない）という世論を台湾内で醸成させるやり方がある。この方策は短期的に台湾の中国離れ促進に繋がるが、そもそも民進党政権が中国に歩み寄る可能性は低いことから、中国にとって状況が不利に転換するわけではない。むしろ戦闘を交えずに台湾の実効支配領域を確実に狭めることができるとともに、中国が将来台湾に軍事進攻を行う際に有利な状況を形成できるため、中長期的には中国にとって悪い話とは言えないだろう。今回の東沙島奪取演習に関する報道は北京から流れたが、中国軍が台湾世論誘導のために意図的に流した可能性もある。

東沙島が真に危機的な状況にあり、台湾が中国に絶対に同島を渡したくないと考えるならば、台湾軍が東沙島に駐留し、対艦・対空・対地の各ミサイルを十分に配備して、本格的に守備するとともに中国本土を攻撃する態勢を整えることもあり得る。また、米軍に駐留してもらうという手もある。そのような

意見は、台湾内では太平島への米軍駐留の話とともに時折でている。これは中国にとって最も危惧するシナリオでもあろう。ただ、蔡英文政権は自ら中国と事を起こすことを避ける慎重な政権であり、自らの東沙島守備能力の強化も米軍駐留も行うことはしないだろう。東沙島の守備部隊も現状維持であり、目立った動きは海外の研究者や専門家、駐台湾大使などを東沙島に招待する程度である<sup>12</sup>。それは中国が蔡政権のコントロールに成功しているとの見方も可能である。

最近中国は三沙市（西沙諸島の永興島に市政府が所在）を西沙区と南沙区に分けることを発表した。西沙区に東沙島を入れることはしなかった。これは東沙島が現在「台湾省」高雄市の行政区に入っているから、海南省の行政区に入れる必要なしとの判断があったのかもしれない。もっとも、南沙諸島の太平島も行政区的には高雄市であるから、この推測に説得力があるとまでは言えない。

また、中国海事局は 5 月 14 日から 7 月 31 日まで河北省の唐山市沿岸から 25km の海域で実弾射撃を実施することを明らかにした<sup>13</sup>。中国人民解放軍創設以来最長と見られる訓練期間と、船の通行も多いと予想される渤海の広範な海域を利用していることに加え、第 2 期蔡英文政権の発足（5 月 20 日）に合わせた形でもあったことから、この訓練は蔡政権への圧力の一環と見ることもできる。その一方で、人民解放軍国防大学の喬良教授（『超限戦』の筆者の一人で退役空軍少将）は、パンデミックは中国にとって台湾を武力で取り戻すチャンスと見なすことはできないと指摘している<sup>14</sup>。このように、台湾に圧力をかける一方で、台湾への武力行使を否定する背反した動きには、中国の真の意図を台湾側に悟らせない、あるいは疑心暗鬼にさせる宣伝戦の意図があるのかもしれない。

## おわりに

台湾における金門島・馬祖列島のような離島は 1950 年代、60 年代であれば、大陸反攻の拠点という位置づけも可能で、軍事上の意味は大きかった。

また、対岸から渡海してくる中国軍を殲滅する際に、台湾にとって台湾海峡の守りは重要であったが、太平洋側に位置するバシー海峡については中国軍の能力が依然低かったために、あまり考慮する必要性がなかった。フィリピンのルソン島西部に米軍が駐留するスービック海軍基地やクラーク空軍基地があったことも、台湾にとっては安心材料だったはずである。しかし、米国との軍事同盟は 1980 年以降消失し、在フィリピンの両米軍基地も 1991 年にフィリピンから撤収した。他方、中国軍は 1990 年代に入ると軍事予算を大幅に増額させて軍事力の近代化を図るようになった。その流れが四半世紀を経て中国軍の南シナ海進出、次いで太平洋進出に繋がり、両海域を結ぶバシー海峡が新たに注目されるに至った。また台湾・バシー両海峡を睨むチョークポイントとして、東沙島の地政学的重要性が改めてクローズアップされるようになったのである。極論すれば、東沙島はいまや軍事戦略的に金門島、馬祖列島よりも重要性が高い地域となったのである<sup>15</sup>。

なお軍事戦略的には、台湾海峡上に位置する澎湖列島も重要である。中国軍の戦力投射能力がさほど高くなかった頃には、澎湖島を足掛かりに台湾本島を攻める選択肢があった。その理由として、台湾本島よりも中国大陸寄りにあるため戦力を投射しやすいことや、平坦（最高標高地点で 70m）で金門ほ

どは要塞化されておらず、面積も狭く占領しやすいことが挙げられる。台湾海峡の中間地点南寄りに位置し、そこを拠点にできれば台湾海峡を制御が容易になるとともに、飛行場や港湾も擁していることから台湾北部・南部にも兵を送り込みやすい戦略上の要地であるといったことが挙げられる。現在の中国軍の能力からすると台湾攻略の足掛かりとしての意味はほぼ消失したが、台湾海峡とバシー海峡をコントロールする意味で、澎湖島の地政学的重要性は高まっている。

以上のように、中国にとって東沙島とバシー海峡の重要性は大きく増しているが、台湾が東沙島に十分な軍事力を配備していない現状では、中国が世界の批判を受けながらも島を奪取する可能性は高くないだろう。しかし、仮に台湾軍なり米軍なりが東沙島に軍を駐留させる方向に動けば、同島奪取に向かう可能性も出てくる。また、今後米中間で対決基調が高まっていけば、米台関係は相対的に強化される方向に動く。中国は台湾に対する軍事的・政治的な圧力を徐々に強化しつつも、米国の大統領選挙の結果が出るまでは、米国の強烈な反応を自ら呼び込む動きを避けると考えられる。

(2020 年 6 月 9 日脱稿)

## プロフィール

profile

### 地域研究部

部長 門間 理良

専門分野：中国・台湾の政治・軍事、中台関係、東アジアの国際関係、中国人民解放軍史

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。

NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111 (内線 29171)

F A X：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>

<sup>1</sup> 「美作戦艦航経臺灣海峡 國軍全程掌握」『軍事新聞通説社（電子版）』2020 年 6 月 4 日。

<sup>2</sup> 例えば、樋口讓次「中国軍、台湾・東沙諸島の奪取演習を計画」*JB Press*, 2020 年 5 月 16 日配

信。

<sup>3</sup> 統合幕僚監部の報道発表資料は飛行経路を発表している。

<sup>4</sup> セオドア ローゼベルトは 6 月 4 日にグアムを出港し、任務に復帰した (Commander, U.S. 7th Fleet, “USS Theodore Roosevelt departs Guam mission ready,” June 4, 2020.)。

<sup>5</sup> ただし、中国軍が宜蘭一帯に上陸し、台湾軍が持ちこたえられないと判断された場合、台湾軍は高速道路の破壊 (トンネルの爆破等) を行い、中国軍上陸部隊の台北進攻を阻止すると思われる。

<sup>6</sup> 2007 年に実施された 23 号演習では陸海空三軍で宜蘭平原に上陸しようとする敵軍を阻止するシナリオが組まれた。この他に盆地に位置する台北市を直撃する上陸地点として淡水河河口から中国軍が遡上する作戦や、基隆港から強硬上陸することもあり得る。これらの予想上陸地点は距離的には宜蘭よりも台北に近い。

<sup>7</sup> 片倉佳史「片倉佳史の台湾歴史紀行 第八回 高雄 (8) - 東沙 (プラタス) 島の歴史」『交流 (PDF 版) No.923 (公益財団法人日本台湾交流協会、2018 年)。

<sup>8</sup> 「海軍退役上將、前東沙指揮官季麟連：東沙就是艘不動航母」『中時電子報』2020 年 5 月 13 日。

<sup>9</sup> 「中国軍が東沙諸島の奪取演習計画 南シナ海で、台湾実効支配の要衝」『共同通信』2020 年 5 月 12 日 6 時 11 分配信。

<sup>10</sup> 「東沙島六月實施環島海域射擊 迫砲與反裝甲火箭反登陸」、「影／共軍操演擬奪東沙？國防部：國軍對外離島有應援計畫」『聯合新聞網』2020 年 5 月 12 日。

<sup>11</sup> 塩沢英一「繰り返された初動の失敗 政治体制の弱さと強さ表出」『東亜』No.636 (財団法人霞山会、2020 年) 9 頁。

<sup>12</sup> 「海外の学者らを東沙島へ、台湾による実効支配の現状を視察」*TAIWA TODAY*, 2019 年 6 月 14 日。

<sup>13</sup> 「7 月末まで実弾射撃 コロナ禍で延期の演習実施へ—中国」『時事ドットコムニュース』2020 年 5 月 13 日。

<sup>14</sup> ‘Too costly’: Chinese military strategist warns now is not the time to take back Taiwan by force, *South China Morning Post*, 4 May, 2020.

<sup>15</sup> しかしながら、金門島と馬祖列島は中国との結びつきを象徴する政治的価値は以前より高まったと言える。